

なからぎ

207号

2014年10月

本は消耗品になってしまったのだろうか

副学長・地域連携センター長 田中和博
京都和食文化研究センター長

一冊の本との出会いがその人の人生を変えたりすることがある。優れた本はそれほどまでの影響力を持っている。私の場合は、小学校5年生の時に、親からプレゼントされて読んだシートン動物記の「オオカミ王ロボ」が、そうした本の一つである。その後、親にねだって残りすべてのシートン動物記を買って貰い読破した。全巻揃ったシートン動物記は私の宝物になった。中学生の時に読んだパールバックの「大地」も蔵書になった。

昔は、図書館の本には個々の本の貸し出しカードがついていた。本の末尾に貼ってある小袋の中に入れており、そのカードを見ると、過去にその本を誰が借りたのかがわかる。その履歴が読書の励みになったとともに、同じ本を読んだのだという連帯感のようなものが生まれた。本を汚さないように、そして変な折り目をつけないように気を遣ったものだ。大学院生の頃になると、学术论文をコピーして、コピーに書き込みをしたり、マーカーで色分けをする読書法に変わっていった。就職したばかりの時は少なからずカルチャーショックを受けた。上司は本に様々な書き込みをしており、本は消耗品であると割り切った考え方をしていたからである。その後何年かして、「三色ボールペンで読む日本語」(斎藤孝)が出版された。今日では、この読書法は定着していると思う。

森林関係の専門書は発行部数も少なく、初版のみで終わってしまうものも多い。したがって、めばしい本は出版されたらすぐを買っている。あとで書き込みをしながら読書するためである。しかし、なかなか読む機会もなく、蔵書が増えすぎて困っている。データベースが発達した今日では、本を手元に置く必要は無いのかもしれない。しかし、背表紙だけでも日々眺めているとその存在を忘れることはない。

どんなにすばらしいデータベースがあっても、それを検索するためのキーワードを知らなければ、自分にとっての新しい世界は開拓されないのではないかと思う。図書館でたまたま手に取った本から自分にとっての新しい世界が開かれたことは何度か経験している。自分が持っている価値観や世界観を拓けることは、深めることよりも遙かに難しい。偶然に出会う本、そうした本の中にこそ新しい世界に繋がる扉が開かれているのかもしれない。図書館には、そうした出会いの場を演出したり提供したりする役割にも期待したい。

(たなか かずひろ：生命環境科学研究科教授)

御紹介の『シートン動物記：オオカミ王ロボほか』(角川つばさ文庫) 請求記号 480.4 || S、『大地』(岩波文庫) 請求記号 933.7 || B || 1~4、『三色ボールペンで読む日本語』(角川文庫) 請求記号 019.12 || Sは、2階閲覧室入口に配架していますので御活用ください。

住まいについて考える本との出会い

図書館運営委員 檜 谷 美恵子

学生の頃に出会った、住まいに関する 2 冊の本を紹介します。

1 冊目は『住居学ノート』（西山卯三編著、勁草書房、1978 年）。京都大学の西山卯三先生のもとで建築学を学び、その後、住居学科の教員になった先生方がまとめられたもので、当時、本学におられた吉野正治先生や広原盛明先生も執筆されています。

大学に進学するとき、学問とは何かなどとは考えず、住まいに興味をもっていたことがきっかけで、住居学科（現・環境デザイン学科）を選びました。入学してから、住居学とは、生活者の視点から住まうという問題を捉え、それを計画に反映させていこうとする学問で、この点がつくる技術に力点をおく建築学とは違うと言われ、なんとなくわかったような気になっていました。ですが、一方では、建築士の受験資格と結びつくカリキュラムが提供されていて、建築学科と大差ない、卒業後は建築分野の技術者として活躍できるといわれると、建築学ではなく、住居学を学んでいることを、どのように説明すればよいのだろうかと考えてしまいました。

そんなとき出会ったのが『住居学ノート』です。この本が新鮮に感じられたのは、住居学の位置づけをめぐる問題意識は、それを教える側にも共有されている、ということを知ったからです。当時、関西の国公立大学で住居学科をもっていたのは奈良女子大学、大阪市立大学と本学の 3 大学で、かつては女性のみが学ぶとされていた家政学や生活科学という名称の学部を設置された、比較的新しい学科でした。このため、赴任した教員もまた、住居学を学問としてどのように構築するのか、という課題に向き合っていたのです。

『住居学ノート』には、生活科学、住居学、住教育をめぐる論考が収録されています。大部の、読み応えのある学問論ですが、あえて「ノート」と題されたのは、その時点での考えをまとめたものであることを表現するためだったようです。学生の頃、その内容をどこまで咀嚼できたのか、定かではありません。しかし、将来、家をつくる仕事にかかわりたいという漠然としたイメージしか持たず、住居学科に入学した学生に、教える側もまた、何を教えるのか、どのような学生を育てるのかをめぐって、真剣に悩み、考えていることを知ったことは、学問の世界の面白さに気づくきっかけになったように思います。

2 冊目は多木浩二の『生きられた家』。初版は 1976 年ですが、手元にあるのは 1984 年の改訂版『生きられた家 ― 経験と象徴』（青土社）です。この本はその後も改定が行われ、2001 年には文庫版もでているようです。住居を、建築物としてではなく、生活の場として捉えるとどのような世界がみえてくるのかを考えていたとき、タイトルに惹かれて、手に取った本です。

著者の多木は哲学者で、引用も哲学書が多いため、字面はおえても、何がしたいのかよくわからない、読みづらい本だったことが印象に残っています。それでも、どのような住まいであれ、〈生きられた家〉、すなわち日々人がそこで住まうという営みを続ける空間には、「それ自体さまざまな語り」があるという、何やら謎めいた語り口に惹かれて最後まで読んだことは覚えています。

私たちは、生まれ育った場所の、見慣れた風景としてそこにあった家々のかたちや人々の暮らしぶりを原風景として記憶していて、

無意識のうちに、それを住まいや家族について考えるさいの拠り所にしてはいますが、繰り返しのように思える日々の暮らしも、また住まい手自身も、時間とともに変化していきます。住まうという経験を通じて、あるいは家族が成長し、暮らし方が変わり、住まいに求めることが変わっていくのです。多木は、住まいと住まい手とは相互に影響を及ぼし合い、その関係性を変化させていくことに着目し、住まい手が日々、住まうという営みを通じて、住まいをつくりかえていく、空間の質を変化させていくことを、「生きられる」、「生きられた」と表現します。そして、技術や計画理論をもとに普遍性を追求する「建築」あるいは建築家の作品としての家の限界性と、〈生きられた家〉とを対比するのです。この眼差しは、建築学と住居学の差異性という私の問題関心につながっていくものでした。だからでしょう、細部は忘れても、『生きられた家』という本のタイトルは深く記憶に刻まれました。

最近、この本のことを思い起こす機会が2度ありました。1度目は、気鋭の若手社会学者である著者から、『マイホーム神話の生成と臨界——住宅社会学の試み』（山本里奈著、岩波書店、2014年）を頂いたことでした。そのなかに、現代社会を「住宅」という視角から分析した先行研究として、多木の『生きられた家』が取り上げられていたのです。

もう1度は、建築雑誌の本年1月号に掲載された、國分功一郎氏の「倫理学と住むこと」という短い論説に、住まうことを考えた哲学者としてマルティン・ハイデッガーが紹介されていたことでした。多木は、ハイデッガーの「建てること、住むこと、考えること」（1951年の講演）に言及し、住むことと建てることの一致が欠落した現代における建築家の存在意義を論じていました。論説の著者は、それには言及していませんが、「倫理

の出発点にあるのは住まいであり、住むことである」という興味深い指摘をした後、ハイデッガーについて論じ、人間は本来住むべきものだと考えていた彼が、一方で「住むことをはじめて学ばなければならない」と述べていることに注意を向けていました。

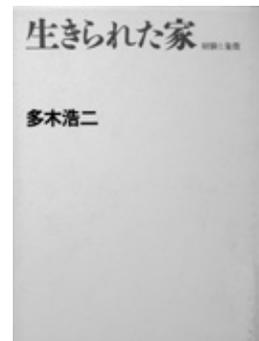
住まいは、個々人の生活と社会のあり方、そのいずれとも接点をもつ財です。どのような住宅を求めるかは、個々人のライフスタイルや内面化された規範と結びついています。それらは社会的につくられてもいるのです。一方、誰もが住まいを確保できるようにする、またそれを適切に維持管理し、次世代に繋いでいくには、社会としての取り組みが必要で、そこにも規範にかかわる問題があります。倫理学と住まいとの接点も、住まうことを「学ばなければならない」というのも、住まいのこうした特質と結びついています。

紹介した2冊は、住宅の社会的意味や住まうことと建てることとの関係性について考えるとき、手元に置いておきたいと思う本です。

紹介図書



住居学ノート
西山 卯三 編著
勁草書房 (1977)



生きられた家 経験
と象徴
多木 浩二 著
青土社 (2000)

(ひのきだに みえこ

: 生命環境科学研究科教授)

御紹介の『住居学ノート』（請求記号 597 || N）、『生きられた家』（請求記号 520.4 || T）、『建築雑誌』2014年1月（129集1653号）開架雑誌コーナー（貸出不可）、『マイホーム神話の生成と臨界：住宅社会学の試み』（請求記号 365.3 || Y）は、2階閲覧室入口に配架していますので御活用ください。

◆◆◆◆◆ 平成26年度蔵書整理報告 ◆◆◆◆◆

8月14日(木)～29日(金)の間、附属図書館2階閲覧室を休室して蔵書整理を実施しました。期間中は皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

今年度は“前期試験後も図書館で学習できる環境を”と休館日の短縮を前に持ってきました。わずか2日間でしたが、多くの利用がありました。

- ① 蔵書点検…アルバイト学生さんの協力も得て、図書館内の図書(東書庫Ⅰを除く約180,700冊)のバーコードを1冊ずつ読込む作業を行いました。

蔵書点検は「目録で所蔵していることになっている資料が本当にあるかどうかを確認する作業」です。蔵書点検の結果、不明が判明した資料は蔵書目録(OPAC)上未所蔵扱いとなり、翌年度の蔵書点検等で発見されれば蔵書目録に再反映されます。

府大図書館は全ての構成員が全ての書庫に特別の手続きなく入室できるようになっています。そのためか間違った所在に返却されている図書は紛失図書の3～4倍になります。時間は掛かりますが、全ての所在を点検することで初めて配架誤りを解消することができます。

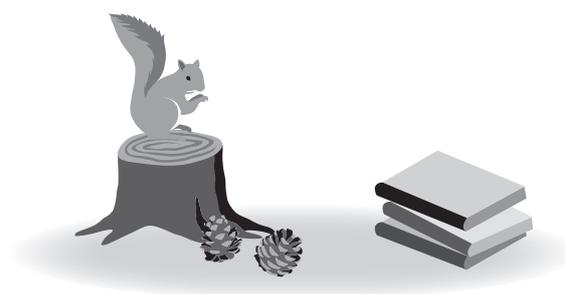
- ② 書庫資料の移動作業…昨年新設した2F書庫(新館)スペースが1年で満杯になってしまいました。

合築棟完成に向けて和雑誌を移動してスペースを一定確保しました。

昨年6月から整理を開始した服飾研究(東書庫Ⅱ)図書は整理が終盤にかかり、当初予定していたスペースには収蔵しきれなくなりました。3ヶ所に分散して配架していますので、書庫内の案内図や書架表示を見て所在を確認していただくようお願いします。



【資料移動途中の2F書庫書架】





平成26年度 第1回 図書館運営委員会開催報告

平成26年度第1回の附属図書館運営委員会が7月24日(木)に第1会議室で開催されました。その概要は、次のとおりです。

協議・報告事項

(1) 各ワーキンググループ(WG)の継続とメンバーの確認について

「自己評価・あり方検討WG」、「選書WG」、「電子ジャーナルWG」の3つの枠組みの継続を確認し、各WGのメンバーが決定された。

(2) 平成25年度の決算及び事業報告について

新規図書購入費について追加予算の配当を受け図書購入を行ったこと、図書館運営費では機関リポジトリ構築関係費が追加措置され構築したこと、電子ジャーナルの購読契約について等、状況報告と委員の意見交換を経て、承認された。

(3) 平成26年度予算について

財政状況が厳しい中、昨年度とほぼ同額予算の確保ができたこと、システム維持管理費については更新年度を迎えたが、26年度中に3館統合システムの稼働が予定されていることから、現行機器の1年間延長リースを行うため、予算としては減額となったこと等を説明し承認された。

(4) 電子ジャーナル購読に係る現状について

2015年度契約について電子ジャーナル購読料予算の確保など、早急に対策が必要であることが報告された。

電子ジャーナルは、本学だけでなく全国の他大学についても同様の問題となっており今後どのように検討を進めるかを協議していくこととなった。

(5) 学術機関リポジトリについて

リポジトリの運営会議委員の選出について、後日各学部、研究科から各1名の選出をすることとなった。

(6) 学習基本図書の購入リスト提出について

本運営委員会で承認を受けた後、全教員へ

の依頼を行う予定。教員会議への報告を依頼し、承認された。

(7) デジタル資料送信サービスの開始について

本学学生教職員を対象として、国立国会図書館がデジタル化した資料のうち入手が困難な資料について本学図書館内でデジタル画像の閲覧と複写が可能となったことが報告され、内部手続きを整えた上で運用を開始することとして了承された。

(8) その他

① 新図書館の整備について

3館図書館統合システムの準備状況、備品関係の準備状況等について報告があった。

② 監視カメラの設置について

階段利用者の安全確保の観点から、2階のフロアに監視カメラを設置予定。管理・運用に関しては利用者のプライバシーに配慮していくことが報告された。

③ 長期貸出について

学部生・院生への長期貸出冊数を昨年度同様12冊とすることが報告された。

平成26年度 図書館運営委員会

26.7.24 現在

所属	職名	委員氏名	所属WG
附属図書館	館長 (文学部教授)	浅井 学	
文学部	教授	山崎 福之	自己評価・あり方検討
	准教授	出口 菜摘	選書
	教授	中 純夫	電子ジャーナル
公共政策学部	教授	大鳥 和夫	自己評価・あり方検討
	准教授	竹部 晴美	電子ジャーナル
	教授	津崎 哲雄	選書
生命環境科学研究科	准教授	沼田 宗典	選書 ※(26前期は矢内純太教授)
	教授	矢内 純太	選書 ※26年度前期まで
	教授	亀井 康富	電子ジャーナル
	准教授	岡 真優子	自己評価・あり方検討
	准教授	田伏 正佳	電子ジャーナル
	教授	檜谷 美恵子	自己評価・あり方検討
	准教授	宮藤 久士	選書
附属図書館	事務長	小林 秀子	
	専門幹	久保 直弘	

図書館からのお知らせ

「2014オープンキャンパス」～図書館にも大勢の来館がありました～

7月19日(土)・20日(日)の両日本学のオープンキャンパスが開催され、好天にも恵まれ、大勢の高校生、保護者の方々と賑わいました。

図書館では両日の午前10時から午後4時まで2階閲覧室を開放し、図書館の蔵書を手にとってご覧いただきました。また校内ツアーに参加された後、あらためて図書館を訪れゆっくりと見学された方も大勢ありました。

参加者は、19日(土) 693人(うち高校生461人)、20日(日) 783人(うち高校生493人)の合計1,476人の方々と賑わいました。

閲覧室の様子を見て回る方が多い中で、座席で熱心に読書をする方、府大図書コーナーや大型図書に興味を持たれた方、また、校内ツアーでは案内する本学の学生から詳しく説明を受ける様子も多く見受けられました。

豊富な資料や、新図書館への期待など図書館に対する感想も多く寄せられました。

本学の学生としてゆっくり図書館を訪れてもらえることを願いながら、今後ともサービス向上に努めていきます。



カレンダー

開館時間

9:00～ 21:00	9:00～ 17:00	休館 土日祝 年末年始
----------------	----------------	-------------------

☆閉館時の図書の返却は、図書館西側(喫煙コーナー付近)の返却ポストをご利用ください。

2014年10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

★10/6(月) 夏休み長期貸出返却予定日

2014年11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

2014年12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

★12/11(木)～ 冬休み長期貸出開始

※返却予定日 1/15(木)

★12/27(土)～1/4(日) 年末年始休館

★1/5(月)～ 開館(9:00～17:00)

★1/8(木)～ 通常開館(9:00～21:00)